自然観の転換と美学受容
―森鷗外の場合

相楽　勉

明治期の文化的創造物の一つは新たな日本語であろう。その形成には西洋語の受容が大きくかかわっているが、この受容とは伝統的語彙に西洋語の翻訳語が加わるというだけではない。また翻訳語の定着がその原語の概念そのままの受容なのかと言うと、これも疑問である。むしろ、その受容過程のなかに伝統的語彙との葛藤を含んだ新たな概念創出があり、それはいわば新たな世界の把握を反映していると考えるべきではなかろうか。西洋近代文化の受容における伝統文化との対峙は避けられない課題であり、それは今日のわれわれにとっても喫緊の課題である。

この明治期の西洋文化受容における伝統的語彙ないし概念との対峙という問題を、本稿では「自然」という翻訳語の定着過程における自然観の変遷という観点から顧みてみたい。今日の我々は「自然観」を「自然というもの」についての見方と考える。それは西洋語 nature のことなのであるが、この翻訳語の定着はおおよそ明治三十年代ころまでのことである。だが、それ以前から使われてきた漢語に由来する「自然」の意味合いがそのころに失われたとは言えないだろう。今日でも「自然」は物のありようを示す形容詞ないし副詞として使われるし、「人為」や「作為」に対立する概念として使われるからである。

もう少し厳密に書籍の中での使用例を調査し検討する課題もある。この語を漢籍で「シゼン」と読む場合の意味と、仏典で「ジネン」と読む場合の意味の違いを考えるためには、関連文献上の使用例をむらなく検討し、翻訳語としての使用の定着を考える上では辞書への反映が大きな手掛かりともなろう[1]。たとえば江戸時代後期に編纂された蘭和辞典『波留麻和解』（1796 年）に蘭語natuurの訳として「自然」が初めて登場するが、その後の仏英独露など多言語からの翻訳過程の精査も大きな研究課題であろう。さらに国内のどういう分野における使用かも精査の対象となる。

しかしながら本稿の関心は、思想上の概念としての「自然」が西洋語 nature の翻訳語としての使用を通してどのような概念内実を得て行ったのかという点にある。nature に「自然」が充てられた理由は、この語に「人為」や「作為」が対立することからある程度理解できる。西洋語 nature に対するさしあたりの対立項は art であるが、それは人間の所作、作為を指す。逆に nature は人間の所作 art が加わらないそのままの状態を意味すると言える。自然科学（natural science）というのは、そういう自然状態の物の在り方、それ自体が一定の法則の下に見出されうるような、合法則的な物の在り方の探究のことである。そして人間の心をも自然法則の観点から見るのが西洋近代の考え方なのである。

人間も含めて科学的実証的に観察されうるものとしての自然（nature）の発見は、明治期の思想的文化にかかわった人々に大きな衝撃を与えた。日本における「哲学」の最初の紹介者となった西

周は本来儒学者だったが、儒学的課題であった「人ノ人タル道」の解明にもいわば科学的な「天然自然の理」の解明を生かすことを考えた。だがそれが実際どのようになされうるかということは容易に解決される問題ではない。西が見出した問題はその後の思想的課題ともなった。

「人ノ人タル道」の解明は儒学の課題を引き継ぐものと西が考えた「哲学」の課題であるばかりではない。「小説」という新たな形式をはじめとする「文学」という思想形態も同様の課題を引き受けたと言えよう。文学もまた同時代の西洋文学の受容、ことにその表現形式と思想の受容によって始まった。明治時代の文学運動においてもまた「自然」が問題になった。明治後期におけるいわゆる「自然主義文学」のことがすぐ思い出されるが、そもそも「小説」という表現形式が見出された初期段階から、西洋的な「自然」と「自然主義」が暗黙の問題になっていたのである。その初発の地点をたどると、森鴎外の初期の評論に行き着く。

西洋的「自然」概念の受容という点から見ても、森は際立った位置を占めている。森はそもそも医学の徒としてドイツに留学し、しかも対独中に西洋の文学にも大きな影響を受け、帰朝後に翻訳・文芸評論、そして小説の創作に携わることになった。まさに森は科学的自然理解の立場を十分わきまえ、さらに当時の西欧文学における「自然主義」にかんする美学的評論にも接し、それらの影響下で自らの文学ないし小説を構想したのである。

後年の森は反自然主義の代表者と目されもするが、その出発点は「自然」に依拠する文学に対する批判を行った最初期の文芸評論に見られる。さらにこの最初の立場を明確にするために、西洋の文芸批評の理論的支柱であった美学理論の研究に没頭した数年があった。この美学受容は「自然」概念批判の観点からも重要である。

本稿ではこの森の初期評論における「自然」問題に着目し、その展開可能性を明らかにすることを通じて新たな「自然」受容の一端を明らかにしたい。最初に、帰朝後最初の評論「小説論」における「自然」問題を初出稿と最終稿とを見比べながら論点を整理する。次いで、同年に発表され最終的に「文學と自然と」というタイトルでまとめられた評論を、初出稿と対比しながら論点を整理し、この時期の森の「自然」批判の核心を抽出することにする。最後にこの一連の「自然」批判の背景を成す森の美学受容の限界と伝統的な「自然」理解の美学的展開可能性を考えることにしたい。

一　「医学の説より出でたる小説論」における「自然」

明治 22 年早々に読売新聞に掲載された「小説論」は、文学に対する森の態度表明として評価されるが、それが後の「自然」や「美学」にかんする問題意識をも既に含んでいる点で極めて興味深い。この論考は明治 25 年に「しがらみ草子」第二十八号に再録され、最終的には明治 29 年に評論集「つきくさ」に「医学の説より出でたる小説論」というタイトルに改められたうえ収録された。この最終稿では初出稿「小説論」の内容が圧縮され多くの修整も加えられている。以下初出稿「小説論」と最終稿「医学の説より出でたる小説論」の表現上の異同に注意しながら、そこで示される「自然」論の核心を考察したい。その際この初出稿の背景事情にかんする神田孝夫や小堀桂一郎の詳細な裏付けと解釈も参照する。

まず森が論の骨子と考えたものを修整された最終稿に基づいて整理してみたい。一言で言うなら、森が考える小説の本質を「エミル、ゾラ」の自然主義小説批判の形で述べたものである。その要点は以下の三点にまとめられる。

(1) ゾラの「試験小説」（＝実験小説）は「クロオド、ベルナアル」の「試験医学」（＝実験医学）の方法を借用したもので、小説中の人物は「分析と解剖とを経たるもの」である。
(2) この「分析と解剖」は「作者の用」をなしていないことはないが、それだけで小説ということはできない。なぜなら、「試験」（＝実験）の結果は「事実」であって、「医」（＝医学）においてはこれで十分だが、小説の「作者」はこれで十分とすべきではない。
(3) 小説を作る者にとって「事実は良材」だが、これを役立てるのは「空想の力」による（「ドオデエ」が「ゾラ」より優れているのはこの点である）。

初出稿「小説論」は論点(1)に先立って「泰西の医説と我詩説」ないし「医術と詩法」の類似性に言及した小永井某の言の批判から始まる。それが医学者にして文学を志す森自身の立場の表明であったのだが、結果として文学にとっての自然という問題を提起したことになる。日本における自然主義文学の興隆は後年のことになるが、執筆時点は“nature“の翻訳語としての「自然」が定着しつつある時代であった。そしてその「自然」とは、感性による経験知によるのではなく「分析と解剖」によって初めて露呈される新たな「自然」であった。森はこの新たな自然の発見自体を否定しているわけでも、さらに「泰西の医説と詩説」の類似自体を否定しているのでもない。ただその「浅薄なる意匠」に、さらに「医学」に基づいた小説を標榜するゾラに代表される「自然派」に対して批判的なのである。

神田孝夫によれば、森の「自然派」批判は初出稿のタイトルに“Cfr. Rudolph von Gottshall, Studien“（ルドルフ・フォン・ゴットシャル「諸論考」参照）と付記されている通り、対独中に読んだゴットシャルの自然主義批評に負うものであり [2]、しかも当時の森にとってこの批評は自分が医学の徒として師事していた「コッホ」と「ベッテンコオフェル」の学風の比較に役立ったとのことである [3]。つまり、森は両者から医学が「「実験と観察」を旨とする事実の学」であることを学び、さらに「ベッテンコオフェル」の「犀利な直観により真理を掴む天才肌の学者」ぶりに驚愕したが、それでも「日本における医学の発展のためには、できるだけ多くのコッホ」が必要との趣旨をメモに記している [4]。つまり、医学の内にも経験的直観と「実験・観察」といった一見相容れない方法的展開があり、その片方だけが正しいわけではないのであり、適用場面に応じてふさわしい評価基準があると森は考えているのであろう。

このような事情を考え合わせると、初出稿「小説論」の問いの意図が若干明らかになる。森は「分析と解剖とは之を小説の結構に用ゆること固より不可なるなし」と述べており、「試験医学」の方法を「小説の結構に応用」すること自体を否定してはいない [5]。しかし「分析、解剖の成績は事実」なのであって、事実だけを問題とする「余輩医人は事実を求むるを以て足れり」とするだろうが、小説家にとってはそれでいいのかと問うのである。

さらに初出稿では「正史」と小説との対比もなされていた。ゾラの「無残なる事業」も「正史」、すなわち歴史的記録としてなら読むべきものとなるが、小説とは事実の範囲内を彷徨するだけでよいものではない、むしろ「分析、解剖の成績は作家の良材なり之を運転使用するの活法は獨り覚悟（「イントユイション」）に依て得べきのみ」[6]と森は述べる。覚悟と訳された「イントユイション」（intuition）は分析解剖された事実全体の「直観」だが、その対象は「イデアール」（理想）とされている。

「イデアール」は、「事実」としての自然を超えるものと言われているので、その評価の基準にかんしては、事実評価とは異なる根拠が必要であることになる。それが論点(3)で「空想の力」と言われているように思われる。

このような議論を通して森が求めているのは、分析解剖の結果を客観的「自然」として提示することを超えて直観する方法であろう。しかしながら、その方法的根拠については「空想の力」などという曖昧な言葉以上の説明はない。この根拠をさらに説明する課題が残される。

ただ、解答に至っていないにしても、ここでの議論は重要な示唆を与える。ここで事実としての自然とは区別される「イデアール」とは、諸事実全体がそこに向けて理解され、それにおいて諸事実全体が「おのずと」（自然に）まとまるものとも言える。それを森は「自然」とは呼ばないが、森が「実験と観察」を経験的直観に生かすような「ベッテンコオフェル」の医学知に見たのも、部分的情報がそこで「おのずと」まとまるような全体知であったのではないだろうか。

この初出稿「小説論」は、一般的には「晩年に至るまで一貫している反自然主義の主張の最も早い立言」[7]などと言われるが、本当に森は反自然主義者と言えるのだろうか。次に、「文學と自然と」という評論における「自然」評価を考えてみたい。

二「文學と自然と」における「自然」概念

明治 22 年初頭に前節の「小説論」によって評論活動を開始した森だが、同年 5 月に書かれ國民之友 50 号に掲載された「「文學ト自然」ヲ読ム」（明治 22 年 5 月 11 日刊）[8]は、文学にとっての「自然」問題にかんする森の見解をより明確に示している。この評論も改訂が重ねられて最終的に『柵草子』28 号の附録に「文學と自然と」というタイトルに改められて収載された [9]。これも初出稿と比べて論点はかなり整理されている。ただしこの議論の背景との関連をよりはっきり示しているのは初出稿「「文學ト自然」ヲ読ム」の方である。従ってここでは整理された最終稿をまず参照し、初出稿を議論の背景を理解するために随時参照することにする。

「小説論」の後、森は徳富蘇峰が主宰する『国民之友』という雑誌を舞台に評論活動を展開するが、この「「文學ト自然」ヲ読ム」は前月『女学雑誌』（明治 22 年 4 月 27 日刊）に掲載された巌本善治（筆名「しのぶ」）の「国民之友第四十八号文学と自然」と題する評論に対する反論として書かれた。巌本の評論自体は『国民之友』に掲載された蘇峰と石橋忍月の文学と美術のついての論に対するものであり、さらにこれらの文学美術論争の背後には「廃娼」や、不道徳な女の役を演じることに異存を申し出た市川団十郎に対する批評などの問題があった。しかし本稿ではこの論争の経過そのものには深入りせず、「自然」概念にかんする巌本と森の対立という点にかかわる限りで触れることにする。

さて、森は巌本の主張を以下の二條とし、その内実について批評する。巌本は初出稿では「女學記者」、最終稿では「撫象子」、蘇峰と石橋忍月は両稿共に「民友子」「局外生」と呼ばれているが、本稿では実名で記すことにする。この評論での巌本の主張を森は次の「二條」に見る。

「一、最大なる文學は自然の儘に自然を写し得たるものなり
二、極美の美術は決して不徳と伴ふことを得ず。」

森はまず「一」の「文學」と「自然」概念を吟味し、それに基づいて「二」の「不徳」にかんする吟味に移り、最終的に「一」の主張に対する反命題「最美なる美文は自然のまゝに自然を寫すことなし」に至る。ただしこの論表の意図は、巌本批評における「文學」概念、「自然」概念の曖昧さを批判し、西欧語の翻訳語としての両語の概念的内容を明確にすることを通じて、新たな文芸批評の基準を提示することを試みることにある。その際、ここでも「小説論」と同じくゴットシャルの論が念頭に置かれている。初出稿ではまさにゴットシャルの『詩学』から数か所がそのまま翻訳引用されている。

しかしながら、批判対象である巌本評論の論旨自体が曖昧であるとは必ずしも言えないように思われる。たとえば、巌本が「自然」と言う時には明らかに翻訳語以前の意味が念頭に置かれている。だから、森の反論以前に巌本が先の二條で言いたかったことも見ておく必要があろう。

しかしながら、批判対象である巌本評論の論旨自体が曖昧であるとは必ずしも言えないように思われる。たとえば、巌本が「自然」と言う時には明らかに翻訳語以前の意味が念頭に置かれている。だから、森の反論以前に巌本が先の二條で言いたかったことも見ておく必要があろう。

先の巌本の「二條」は「文学美術に関する今の輿論」の見本としての蘇峰、忍月二人の所論それぞれに対してなされた反論なのである[10]。「文章の趣味」が「言論不自由のために製造されたもの」という蘇峰の主張に対して「自然のまゝに自然を寫す」と言われたのであり、美術が「不徳と伴ふことを得ず」というのも、「人の徳も悉く自然より養はる」という見解に基づいている。この「自然」とは、「製造」などの人為に対するそれであり、それ自身が「美」であり「神韻」と考えられているのである。森も論争を通じてそのことを理解したうえで、そのような自然観に対してあえて別の「自然」理解を対置し、「文学」というものの新たな概念を確立しようとしている。

それゆえここで検討したいのは、両者のどちらが正しいかを判定することではなく、西欧近代の概念あるいは考え方が森を通してどのように受容されどのように展開されたかということである。以下、巌本の二命題にかんする森反論の意図を明らかにしたい。

「一」に関しては、まず「最大の文學」が何を指すのかが問われる。巌本の言う「文學」が、蘇峰が「言論不自由ト文學ノ発達」と言う時の「文學」と同義なら、それは「汎き義」の文学なので、「自然を寫す叙事もあれば、精神を叙する議論」、さらに「科学」「道学」(道徳)「詩学」も含むと森は考える。そしてこの広義の文学概念に基づくなら「最大ノ文學」と「極美ノ美術」を並置するのは不適当であると批判するわけである。森によれば、巌本は「美術が美を要するが如くに、文学は大を要す」と言いたいようだが、「美」が美術の「特有スル性」(=固有性)なのに対して、「大」が範囲を言うなら美術にかんしても同じことが言え、また「大」が審美上の「高大(エルハーベン)」のことならこれも美術にかんして該当することであり、やはり文学の固有性とは言えないと森は言う[11]。

つまり、森は巌本が「美術」と対置させる「文學」がどのようなものなのかをはっきりさせる必要があると考える。そこで「文學に二あり」と続けるのである。

> 文学に二あり。一は美術の範囲内にありて、其補完部をなしたる美文學にして、其性や美なり。一は美術と關渉せずして獨立したる科學にして其性や眞なり。極美の美術に對すべきは最眞の科學ならむ[12]

初出稿では「文學」に「リテラツール」（Literatur）とルビが振られており、さらに「美文學」に「シェーネ・リテラツール」（schöne Literatur）、また「科學」は「科文學」と表記され「ヴィッセンシャフトリッヘ・リテラツール」(wissenschaftliche Literatur)とルビが振られていた。この西洋的「リテラツール」内の区別を考慮すると、「美文學」は「美術」と同類であり、「科文學」「科學」の方が「美術」と対置される「文學」ということになる。つまり「一」條の命題が「二」條で言われる美術に対立するものなら、「自然のまゝに自然を寫す」のは「科文學」「科學」の方ということになる。

「科學」は「眞」（真理）に関わるので、「一」條は「最大の文學は自然のまゝに自然を寫し得たるもの」ではなく「最真の科學は自然のまゝに自然を寫し得たるもの」と言われるべきこととなるが、これもまた森の許容するものではない。「本草綱目」などは確かに「自然を寫す」と言えるが、「論語」「純理性の評」（のような科學）は「自然」ではなく「精神」（ガイスト Geist）を写したものだからである。科學が「寫す」のは「精神」も含む「事実」（タートザッヘ）であるから、「最眞の科學は事実のまゝに事実を寫し得たるものなり」というのが適切だと森は結論付けている。

だが「文學」には「美文學」も含まれ、そもそも巌本が「文學」と言うのもこちらであることは明らかだ。「一」條の「文學」が「美文學」なら「一」は「二」に対置される命題ではなく、また「美文學」に関して「自然のまゝに自然を寫す」と言えるかどうかが問われうることになる。

森はこの美文學の自然問題を一旦保留し、美文學もその「一区域」である「美術」に関する「不徳」問題を先に取り上げる。この問題は、そもそもは当時の市川団十郎が不道徳な女の役を演じることを厭う発言に由来しており、いわば道徳的に醜悪なものの美はあるのかという問題であった。巌本は「実際に醜きものも此れを写せば美しくなる、之を美しくする所ろぞ即はち文学美術の長とする所なれ」という意見は間違いだと言うのである。そして、その根拠として示されるのも「自然」である。「実際に無き者」を「製造」することはできないのであって、人の智識も徳も「自然より養わる」と言うのである。結局ここでも「自然」が問題になる。森に従って、「二」條にかんする議論を追うことにする。

この問題は、西洋では「善と美」あるいは「倫理と美」の関係という古典的問題である。最終稿の方には「プラトオが学派」なら「美なる徳を極致」として美と善を「一に帰せしむる」だろうが「今の学者」はそうではないと書かれている。「美」の問題と「善」の問題は区別すべきということである。だがその理由はどう説明されるのだろうか。

森はそのために「象」（初出稿では「顕象（フェノメン）」）と「想（イデエ）」という概念対を手掛かりにする。「自然の一象」には「因」があり、現に見えている「象」が「果」なのである。この「因果」関係をたどると際限がない。むしろ「因果の圏線を脱して此象を見る」なら「想（イデエ）」が生じると言うのである[13]。このくだりは、初出稿ではゴットシャルの文章そのままの引用によっていた。

> 爰ニ自然ノ「顕象」アリ此「顕象」ヤ因アッテ而シテ生ズ故ニ果ナリ然レドモ又タ能ク他ノ「顕象」ヲ生ズ故ニ因ナリ因耶果耶推シテ千載ノ上ニ遡リ又千載ノ下ニ下ルモ遂ニ其窮極スル所ヲ知ラズ人アリ此無端ノ長鎖ヲ滅烈シ因果ノ圏線ヲ超脱シテ此「顕象」ヲ視ルトキハ「想（イデエ）」ヲ生ズ「想」ナルモノハ有限ノ一物ニ就イテ無極ノ意義ヲ視ルモノナリ[14]

「顕象」（＝現象）を背後の因果関係を脱して見るときには「想」（イデー）が生じるという趣旨は最終稿と変わらない。ただこの文をゴットシャルの翻訳と考えて原文と比べると戸惑う点もある。この森の文章の元になっているゴットシャル『詩学』冒頭の文章を訳すと以下のようになっている。

> 現象の世界をその相互連関において認識しようとする悟性（Verstand）は、自分が直ちに原因と結果の無限の連鎖に巻き込まれていることに気づく。どの原因も結果を有すと同時に、それ自身が先行する原因の結果である。悟性がこの自らの探究を恣意的に中断したり制限したりできるのは、この連鎖に従いながら休もうと欲する場合だけだ。われわれがこういう認識の仕方や衝動の盲目的な力から解き放たれ、われわれの欲望（Wollen）や他の物事との関連から解き放たれて諸事物を眺める場合にのみ、諸々の理念（Ideen）の世界が開かれるのであり、そこでこそわれわれは個々のものをその永遠の意味において把握し、同時にわれわれ自身を永遠の精神のまなざしを具えた個々の主観として見るのだ [15]。

すぐ気づくことは、原文の主語である「悟性」「われわれ」が森訳でははっきりせず「人アリ」となっていることである。つまり森訳では「悟性」という人間の能力の評価が問題ではなく、経験の変化のみが記述されているとも言える。「想」の直観を強調する森だが、人間自身の能力の吟味という観点なしに真善美にかかわる「文學」内部の区別について議論がなされている。つまり、問題は「善美の区別」であり、「不徳と伴うことを得ず」という巌本説に対する反論であるが、そのために「象」と「想」との区別を森があえて問題にするのは、美術は「象」にかかわる面があり、それゆえにともすると「不徳」な現実（「象」）と混同されがちであるからである。

「想を得て物を顧みざることは、科學者の能くするところ」だが、「美術家は想を使ふに物を藉(か)らざること能わず」（物の姿を借りざるを得ない）と森は言う。「科學」ないし「科文學」にとっては「法」（法則）のみが問題であって、それを発見するための「象」（＝自然現象そのもの）はいわば魚を捕るための「筌」（道具）に過ぎない。同じように「善」も「象以外」のところで「全からむ」ことを求める。他方「唯だ美は象を存す」、すなわち美は「象」における「想火を以て焚きたる後の形體」にのみ認められる。ここに「美」の理解の難しさがあると森は言う。「眞を奉ずる印度の學と、善を奉ずる支那の學が相合して我国の開化をなした」ので「形體を卑しむ」傾向があり、「想」によって見出だされた「形體」としての美を見出しづらいのだと言うのである。

この「形體」に見出される「美」こそ「象」から離れた「善」とは区別され、「不徳に伴う」こともありうる。ただし、森がその例として挙げるのは「美の一変したる高大」のみである。「愛して身を汚すお軽」も「高大」（＝崇高）であり美であると言うことで、巌本の「二」條の背景であった団十郎評価にも触れている。逆に言うと、「不徳」の美は「高大」の境に達する場合に限られ、それは「想火」にて自然の塵を焚き去る「美文家の力」によるのである。

同じことが、美が「醜」を受容する場合にも言える。巌本が「実際に醜きものを寫しては美しくなることはない」というのは、「自然のまゝに自然を寫す」と考えるからということになる。「不徳」の件で「善と美」を混同するのも、「自然」の意味をあいまいにしたまま崇拝していることによると森は言いたいのである。

こうして森は「自然」の問題に戻るが、以上の検討の結果を通して巌本の二條の内容は「最美なる美文は自然のまゝに自然をうつし得たるものなり」という命題として整理されたうえで、吟味の

対象になる。まず、「自然のまゝに自然を寫す」のが「美文」なら、「博物書」も「正史」も「美文」ということになる矛盾を突くが、さらに上記命題を「美文」の条件とするなら、ゾラの「詩學上の自然主義」を味方に取ってしまうことになると言う。これは不徳を伴う美を認めない巌本の主張と折り合うはずがない。森はきわめて論理的に上記命題を否定することになる。

だが森の議論は巌本の論を構成する語を欧米語の翻訳としてのみ解することによって成り立っている。巌本の方は森の批判に対して自分の「自然」概念を説明しようと何度も試みている。自分のいう「自然」に関して、「固より自然の精神を含めり」とか「人の理想は自然より来り若くは自然の為に発達せしめらる」[16]などと述べ、森の提示する概念に対して自分の語釈を対置しようとしているが、森はあくまで「自然」と「精神」を対立させる概念構成にこだわる。

ただし、森の目論見が新たな日本語の創出にあると考えるなら、この批評の意図は理解できる。「七、最美なる美文は自然のまゝに自然を寫すことなし」というこの評論の結論的命題はそういう意図の明確な表明であり、文芸評論のための新たな枠組みの提示であろう。森はここで、巌本が特に抵抗を感じて批判した蘇峰の「製造」概念を再び取り上げる。「実際になきものをいかにして製造するか」という巌本の批判に対して、それなら「文学美術には製造なしとするにや。若し然らば自然のまゝに自然を寫すといふ寫すの語は模倣の義ならむ」と森は言う [17]。巌本が森に対して、「自然」から理想が来るという反論を行っていることからしても、自然を寫すことを単なる模倣と巌本が考えるはずはない。森は巌本が「自然の神韻」あるいは「粋」と語った事柄を、精神による「無意識の想」（Idee）とし、いわば人間の認識問題、さらには創造行為として考えたいのである。その趣旨が集約された最終部分を、ゴットシャル『詩学』への依存がドイツ語のルビに反映された初出稿で引用する。

> 夫れ自識（ベブスト）ノ「想」ハ「精神」ナリ不自識ノ「想」ハ「自然」ナリ「美」ハ「自然」ニ眠テ「精神」ニ醒ム「美」ノ「精神」中ニ渙發スル之ヲ「空想（ファンタジー）」ト謂フ「空想」ノ「美」ヲ得ルヤ「自然」ヨリス然レドモ「自然」ノ儘ニ「自然」ヲ「精神」中ニ寫シタルモノニ非ズ「自然」二附帯セル多少ノ塵埃ヲ「想」火ニテ焚キ盡シテ能ク「美」ヲ成セシナリ [18]

この文章の少なくとも前半は『詩学』の部分訳であるが、最後の部分は森独自の表現になっている（下線部参照。下線は筆者による）。巌本への反論命題は「美文は自然のまゝに自然を寫すことなし」となっていたが、今の文によれば、「美文」が「自然」と無関係であるのではなく、美は「自然」の内に微睡んでいるのである。「自然」の内なる美を取り出すのは「寫す」ことではなく、「自然」が被った塵埃を燃やし尽くす「空想」という能力による。そして「空想」によって見出された「美」に「軀を得しむる」のが「美術」である。「美術」はそういう意味で「製造」だというのである。巌本の「自然」の「寫し」は作為人為の拒否であり、自然に従えばおのずと「神韻」が現れると言うのだが、森はそういう経験を、ゴットシャルを手掛かりに「精神」の内的経験の組み立てと動態として理解しようとする。そこに文芸批評の論理を構想するのである。

結びにかえて

森は最初の評論「小説論」において、実験医学の方法を導入したゾラの自然主義の批判を通して文学独自の境域と方法的基礎を示そうとした。それは医学の徒として文学にかかわる自らの立場の表明でもあり、またまさにその 4 年前に坪内逍遥が提起した「小説」という表現形態にかんする自らの立場からの批評でもあった。ここではまだ逍遥に対する真っ向からの批判はなされていないが、『小説神髄』の読解が前提と考えられる表現は多々見出される [19]。いずれにせよ森にとって「自然主義」と言われる時の「自然」（nature）の吟味は避けられない課題だった。巌本の評論「文學と自然」は、そのための絶好の素材と思われたのではないか。森がそこでの「自然」をかなり強引に西欧語natureとして読み切る一つの理由はここにあろう。だが森が「自然のまゝに自然を寫し得たる」という巌本の文學評価に過剰とも言える反論をするもう一つの理由は、巌本が語る「自然」が伝統的な意味での「自然」であり、そこにはまさに西が「人ノ人タル道」と述べたような道徳的価値観が含まれていたからだと思われる。

巌本は言う、「人の智識は悉く自然より發する、人の徳も悉く自然より養はる、人の美のみ安んぞ亦た之より來らざらんや」[20]。「不徳」批判にその一端が示されているが、森は「小説」の領分を際立てるためにむしろ真善美の領域を区別しようとするのであり、そこから新たな日本語による世界観を打ち立てようとするのである。このような意図に基づく巌本への批判は一連の論争の最後に書かれた**「再び自然を崇拝する人にいふ」（全集 22 巻p.14）**でよりはっきりなされている。「撫象子〔＝巌本のこと〕が自然中の神韻と粹との性元といへるものは自然の美なり。わが想火にて塵を焚き去りし美といひしは術の美なり」、すなわち森は巌本の「自然中の神髄と粋」の大元が「美」であることは認めながら、「塵を焚き去りし美」をそれから区別する。批判的観点のない巌本の立場においては「渾然たる同一體」が出現し、美と眞と善が一つになってしまうからである。

このような新たな日本語による文芸理論を構想するにあたって、森が理論的に依拠したのがゴットシャルだった。「小説論」が依拠した自然主義に関する批評もその一端と言えるが、『詩学』は当時のドイツではかなり人口に膾炙した「美学」のテキストであったようだ。「小説論」で「分析と解剖」によって露呈する事実を超える「空想の力」と述べられた小説固有の次元は、『詩学』の読解を介して「想」として若干の理論化を見た。これをきっかけに森は「美学」理論の文芸批評の方法としての有効性に気づき、以後ハルトマン、フォルケルト、グロースなどのテキストに親しみ、その翻訳を通して自らの文学的立場を自覚的に理論化していく。

それは逆に言えば、彼の文芸理論は当時のドイツの美学に基づいた文芸評論の影響のもとにあるということにもなる。森の参照したゴットシャル、ハルトマンの美学著作には、ヘーゲルやショーペンハウアーの影響が見て取れる。それらのさらに背後にはカントの古典的議論がある。森の「自然」批判の背景には文芸の固有性にかんするドイツ美学的系譜があるのだが、森がその全貌を把握していたわけではないだろう。少なくともカントにかんして直接知っているようには思えない。というのも、美学の古典的議論と看做されるカント『判断力批判』において、「自然」の問題は一番大きな課題だったからである。

森とゴットシャルを一旦脇に置くなら、巌本の「自然のまゝに自然を寫す」という主張も、「不徳」と美術の関係も、カントの「自然」論となら対比的に考察することもできるように思われる。カントにおいて「自然」は二つの仕方で問われた。自然はまず感性的経験の対象として「悟性」のカテゴ

リーで限定されうる限りでの自然、いわば科学の対象である機械的自然である（『純粋理性批判』前半）。もう一つは「合目的性」という観点からみられる自然である（『判断力批判』）。しかもそれはまず利害関心から脱した「快不快の感情」による美的判断の場面から考えられている。そういう快を感じる自然とは、単に物理的機構としてのそれではなく、全体として人為を超えた不可視の秩序（＝目的）を垣間見せるそれである。カントにはこういう自然美の経験が、人間の心の内なる善の理念に導く仲立ちになると思われた。それゆえ人のわざが生み出す「芸術美」にかんしても、その美的達成の基準は「あたかも自然の産物であるかのようにみえる」[21]ことに求められてもいる。またそういう芸術作品を産みだす能力を「天才」（Genie）と呼ぶが、「天才というのは、それを通して自然が芸術に規則を与えるような、生まれつきの素質である」[22]と述べている。もちろん比喩的な言い方ではあるが、経験としては確かに「自然のまゝに自然を寫す」ことにもなる。

もちろん巌本の考えがカントと同一であると性急に判断すべきではない。カントが追究しているのはあくまで人間主体の能力の吟味であり、そこに留まるのであって、「自然」を人間の従うべきもののように語る巌本とはおそらく相容れない。森がゴットシャルから学んだ「自然」を超える「想」（Idee）も、元はと言えばカントに由来する。天才的創作は「現実の自然」が与える素材から「自然を凌駕するもの」を産出するのであって、それが「美的理念」とも呼ばれている[23]。

森はカント以来の哲学的脈絡を正確には理解していないだろう。ゴットシャルの「悟性」が訳されないままであることにもその一端が垣間見られる。その後の森が「美学」受容を通じてたどった道は、西洋近代における「自然」思想を受容し消化し、人間と世界の在り方に対する新たな理解を導く道であったと言える。

註

1 木村一氏の国際哲学研究センター研究会での口頭発表「訳語「自然」の定着と一般化」（2016 年 10 月 12 日）における教示による。

2 神田孝夫『比較文学論攷：鴎外・漢詩・西洋化』（2001 年 12 月、神田孝夫遺稿集刊行会編、以下、**神田 2001** と略記）、5 頁参照。Gottshall の著書„Litetrarische Todtenklänge und Lebensfragen“ 1885,Berlin, の “Studien”（諸論考）と題された後半部の第一論文 Der naturalistische und photographische Roman in Frankreich “（フランスにおける自然主義的小説と写真主義的小説）が参照あるいは部分的に翻訳引用されている。なおゴットシャルの原テキストとのより詳細な対比は、小堀桂一郎『若き日の森鴎外』（1969 年 10 月、東京大学出版会、以下、**小堀 1969** と略記）379 頁以下でなされている。

3 神田 2001、5〜16 頁参照。

4 神田 2001、8~9 頁。

5 『森鴎外全集　第三八巻』岩波書店、452 頁。以下『全集・・・巻』と略記。

6 『全集　第三十八巻』452 頁。

7 小堀 1969、377 頁。

8 『全集　第三十八巻』458〜463 頁。

9 『全集　第二十二巻』9~14 頁。

10 小倉斉「「文学と自然」論争における鴎外――「『文学ト自然』ヲ読ム」の残した問題――」（愛知淑徳短期大学国文学会、ASKA-R（知のアーカイブ）、1983 年、以下**小倉 1983** と略記）、42 頁以下参照。特に巌本の森に対する反論で述べられる「自然の神韻」が「きわめて道徳的色合い、教導性の濃いもの」で

あると指摘されている。

[11] 『全集　第三十八巻』458 頁。

[12] 『全集　第二十二巻』10 頁。

[13] 『全集　第二十二巻』10 頁。

[14] 『全集　第三十八巻』459 頁。

[15] Rudolf von Gottshall “Poetik Die Dichtkunst und ihre Technik” (『詩学　詩芸術とその技巧』) Dresden,1882, 2 頁冒頭、この部分はこの著の冒頭文。神田 2001 の 20 頁、小堀 1969 の 393 頁にも引用されている。

[16] 巌本「国民之友第五十号に於ける『文学と自然』を読む、を謹読す」参照。

[17] 『全集　第二十二巻』13 頁。

[18] 『全集　第三十八巻』643 頁。

[19] 小堀 1969、387 頁以下参照。

[20] 小堀 1969、448 頁以下参照。

[21] Kant “Kritik der Urteilskraft” PHB 版、 S.159

[22] 同上、S.160

[23] 同上、S.168

キーワード：自然、美学、森鴎外、翻訳語、自然主義